

岩滝用水物語

「阿波の里 月夜にひばりが 足を灼く」

こう謳われた大俣上喜来の村は、日開谷川の扇状地の上であり、降った雨はすぐにしみこんでなくなってしまう、田畑には砂利や石が多く、夏の強い日差しを受け、焼け付くように熱くなり、作物が育ちませんでした。

けれども、この地に暮らす人々は、荒れ地を切り開き、日照りの時は城王山に登り、じょうれい踊りを奉納して雨乞いするなど、日頃から神仏を敬愛し、信心深く、よく働いてきました。

今から二〇〇年ほど前のこと、七月に入って、かれこれ三〇日も雨が降らず、土は乾ききってしまいました。これまで、精魂込めて育ててきた稲も、もはや枯れようとしていました。

「雨が降ればなあ。」

「今日も降らんなあ いったい、いつになれば。」

村の人々は、青空を見上げ、ため息をつくばかりでした。

「今年も稲が枯れてしもうた。」

佐太郎は、ひからびた稲穂を手に取り、力なく見つめていました。

一年前の暑い夏の夜、日照りと闘い続けた佐太郎の父親は、

「米の握り飯をみんなに腹一杯食わせてやりてえなあ。」
と言いながら、極楽へと旅立っていきました。

佐太郎は、何とか水を手に入れようと、村の衆と庚申待で夜通し話し合っていました。

「何とかして日開谷川の水を田畑へひけんものやろか。いっそ、素掘りで溝を掘ってみよか。」

「ほんなん、あつか。大水が出たらどないするんや。掘った溝を通って、一気に鉄砲水が村へ流れ込んでくるぞ。ほしたら、村は全滅じゃわ。」

「ほんなら、材木を切つて前のように、もう一回樋をつないだらどうやろか。」

「佐太郎おまえなあ、どんだけ材木調達せなあかんねん。銭がなんぼあっても足らんぞ。ほれに、樋の中を通る水で田んぼ全部に水が回らんし。前のときに村をあげてつないどつた樋も、ひとたび嵐や大水が来たら、あつという間に流されて壊れてしもうたでないか。もう、これ以上作り直しやはでけへんわ。」

佐太郎は、黙り込んでしまいました。それでも、再び口を開くと

「ほんなら、北原の崖に穴を掘って、水を通さんか。岩穴なら絶対流されせんし、子や孫の代までずうつと使えるんやないか。」

集まっていた村の衆は、どっと笑い声を上げました。

「おまえ、いけるんか。」

「あんな硬い岩にどうやって、穴を掘るんや。しかも、百間は掘らなあかんでないか。」

「まあ、掘れたとしても、百年はかかるな。ほしたら、ここにおるもんだあれも生きとりやせんわ。子や孫のため言うて、子や孫が困るんちゃうか。」

笑いのものにされ、拳を握りしめて聞いていた佐太郎は、一気に立ち上がって、言いました。

「ほんなら、このままずっと水がなしでもええんか。このまま、米がほしい、水がほしい言うて、子や孫にもなんもしてやれず、終わっていくんでええんか。」

急な佐太郎の荒々しい声に、村の衆は、驚いて、佐太郎の顔を見上げました。村の衆も、水はのどから手が出るほど、欲しくてたまらないものでした。けれども、池を作っても、何日お祈りしても、どうやって、十分な水が手に入らないことは、嫌と言うほど味わってきたのです。村の衆は、うつむいて黙り込んでしまいました。

「もうええわ、わし一人でも掘ったるわ。」

そう言い放つと、佐太郎は庚神祠から飛び出していきました。

次の日の夜から、カチン、カチン、鉄のみの高い音が、勝柄口から螢の飛び交う日開谷川に響いてきました。幾夜も、幾夜も鉄のみの音は続きました。昼は田畑で野良仕事を勤めた佐太郎が、一人で掘り進めているのでした。カチン、カチン。鉄のみの音は、だんだん弱々しくなり、途切れ始めました。岩嶽と呼ばれる崖の石は、にぶい灰色であまりにも固く、佐太郎の鉄のみを跳ね返します。佐太郎の掘ったところは、まだ、穴と呼べるほどのものではなく、自分の体さえ入り切れないくらいのものでした。雪が舞う頃、佐太郎の鉄のみはついに、曲がつて折れてしまいました。佐太郎の手は、指が曲がり、うまく鉄のみを握れなくなってしまうていました。「もう、終わりやな。おとうはん、ごめん。わしはおとうはんの願いに報いることがでけなんだ。情けない息子でごめん。許してつかあさい。」そう言うのと、佐太郎は体をゆっくりと横たえ、しばらくすると、石のように固くなった体をひこずるように家へと戻っていきました。その後、鉄のみの音は虚しく消えていきました。

「佐太郎も考えなしじゃなあ。」

「いやいや、ようがんばったと思うでよ。あいつは、一本気じゃけんな。」

「ほれでも、無理なことは無理じゃわな。」

村の衆は、口々に佐太郎のことを噂しましたが、いつの間にか、何事も無かったかのようになり、岩嶽の話は消えてしまいました。

日も暮れて、あたりに螢の小さな光が飛び交う暗がりの中、「おんあぼきやべいろしやのう まかぼだらまに はんどまじんばら はらばりたやうん」と、か細い小さな声で光明真言が聞こえてきました。

日開谷川の岸边にたたずんでいた佐太郎は、一人の年老いた巡礼遍路が境目峠の方から下ってくるのを見つけてました。そのお遍路は、佐太郎を見ると「すまんですが、このあたりにどこか一夜の宿をお貸しくださるところはござえませんか。軒先でもええんですけれど。」と話しかけました。佐太郎は「それは、難儀なこと。よければ、うちの離れにでも。」と言って、そのお遍路を家まで連れてきました。

いつもは麦飯しか食べれない佐太郎は、無き父親のために供えようとつておいた大切なにぎりめしをもつて離れに入りました。「お疲れのことでしょうな。これといって、お出しする物はありませんが、お召し上がりください。」

「まことにもつてあいすまんことで。宿の上に食べもんまで。」

「なんの。遠慮のうお食べください。お接待ですけん。お遍路さんは、わしらの代わりに回つてくださると信じとるけんなあ。」そう言つて、笹の葉にのせたにぎりめし二つを差し出しました。文右衛門は、「ありがとうございます。」と言いながら、今日初めての食べ物をお口にしました。

「ところで、おたくさんはどこから来なすつたんかいな。」

「備前の吉備いうところですよ。八十八番の大窪寺で杖を納めて、犬墓大師で光明真言を七回唱えた後、高野山へお札を納めに行く途中ですよ。」

「ほう、遠いところから来なすつたんじゃなあ。まあ、こんなこと聞くのもなんじゃけど、なんでお四国参りをしよんで。」

「ええ、それは、・・・。」と言つたきり、にぎりめしをつかんだまま、黙り込んでしまいました。

「ああ、すまんかつたなあ。なんかいかんこと聞いてしもた。」

「いや、こちらこそすまんこつて、こんなようしてもろとるのに。」

「なんか、お礼にできることはありませんか。」

「いやいや、お礼やは、ええでわ。そんなつもりで来てもろたんではないけんあ。」

「ほうですか。すんませんなあ。」座敷に座つていた文右衛門は頭を下げ、ふと、目を遠くにやると、土間に転がつている古びて錆びた鉄のみを見つけました。

「あれは、鉄のみですよ。わしは、備前で石工をしとるもんで。岡山のお城の石垣修理にも呼ばれたことがあるんですよ。」

「ああ、あの鉄ののみは、もうほおつとんでわ。」

「ほうですか・・・。うちのいえは、もともとは池田のお殿さんに仕えとつた石奉行で、天下の大坂城の石垣も小豆島から切り出して運んだんですよ。それができた人も、備前は昔から、長船ゆうてええ刀鍛冶がおつてな、その流れを汲んで鉄を使わしたら、ほんま、どこにも負けへんのですわ。」

「え・・・ほんなら、ほの鉄のみ使うたら、どんな石でも打ち割ることができんですよ。」

佐太郎は、座り直して正座をし、じつと文右衛門の口元を見つめました。

「ほれは、きつとどんな硬い石でも。御影の石でも、大島の石でも割れますよつて。」

「ほんまですか。ほんまに、ほんまですか。」

文右衛門は、握り飯をもつたままの佐太郎の腕をつかんで言いました。

「あの、ほんまにすまんのやけど、その鉄のみを分けてもらえまへんやろか。」

「ほれは、かまいまへんけど、なんで鉄のみがいりますのかいな。」

「実は、わしらの村は、月夜に雲雀が足を灼く、言いましたな・・・。北原の崖を掘り込もう思うて、使いよつたんやけど、どうしても石に負けてしもうて、掘れまへんでした。」

佐太郎は、岩穴を掘つて、日開谷川から水を引こうとしたこと、米の握り飯を腹一杯食べた。

せてやりてえ言うて父親が亡くなったことなどを、一気に話しました。

「ほうですか……。ここで、出会いましたのも、何かのご縁、高野山へ参った後、備前に戻って、必ず戻ってきます。」

次の日の朝、文右衛門は切幡寺に向かつて出立しました。

佐太郎が文右衛門を見送ってから、3か月ほど経ったある日の夜。佐太郎の家の戸口で「こんばんわ、お久しぶりでござえます。」という声がありました。佐太郎は、慌てて戸口を飛び出しました。

「ほんまに戻ってきてくれたんですね。文右衛門はん、ありがとうございます。」

「遅うなつてすみません。鉄のみをたくさん仕入れていましたもので……。」

そう言うて、文右衛門は十本の鉄のみを取り出して見せました。

「明日から、この鉄のみで掘り込んでいきますんで。」

「文右衛門さん、ほんまにありがとうございます。」

「佐太郎さん、一つだけお願いがあります。」

「何ですか。どんなことでも言うてください。」

「勤めが終わるまで、犬墓大師堂に泊まらせてほしいのです。」

「ほれはかまいましまへんけど、何ですか。家へ泊まればよろしいのに。」

「いえ、一日の勤めが終わった後、犬墓大師堂で光明真言と般若心経をあげたい思てます。」

「光明真言と般若心経……。毎日ですか。」

「へえ、毎日です。犬墓大師堂におるときは、近くにおる感じがしたのです。」

「近くとは。何の近くですか。お大師さんですか」

「それは……。」

「……。すみません、また、余計なこと聞いてしまいましたな。忘れてください。明日、村の庄屋さんにお願いで泊まれるようにしときます。」

「こちらこそ、すみません。よろしゅうお頼みます。」

次の日から、日開谷に鉄のみの音が響き出しました。

カチーン、カチーン、

「おい、佐太郎が、また掘り始めたんちゃうか。」

「なんか、備前国から石工が来とるらしいで。」

「ほつとき、もう。また、一か月もしたら気が済んでやめるんちゃうか。きつと。」

一のみ、一欠け、文右衛門は、少しも休まず、毎日毎日、槌とのみをふるいました。日が暮れると、佐太郎は北原の崖にやってきて、文右衛門に晩飯を振る舞い、文右衛門が掘りためた岩のかけらを運び出すのでした。

カチーン、カチーン、日が暮れても鉄のみの音は、日開谷に響いています。夜も遅くなり、のみの音が消えると、小さく光明真言が聞こえてきました。

おんあぼきゃべいろしゃのう まかぼたらまに はんどまじんばら はらばりたやうん

光明真言が消えて、朝日が輝く頃になると、再びカチーン、カチーンと鉄のみの音が響き渡るのです。

文右衛門が岩穴を掘り始めてから、1か月。日開谷川の川下の村では、ある騒動が起り始めていました。

「佐太郎はん、今度は岩を掘るのをやめへんなあ。」

「なんか、備前から助っ人をよんどるらしいで。」

「ほいつの鉄のみは、北原の硬い岩もきっちりと砕いとるらしいでよ」

「ほんなら、万が一、岩穴が抜けてしもうたら、日開谷の水をとられてしまふでないか。」

「ほうよ、もしかかして水を独り占めにする気じゃ。」

「ほれは、ゆるせんでよ。今のうちにやめさせちゃらんと。」

「ほうじゃ、明日みなでおしかけんで。」

川下の村の衆は、勇んで、文右衛門と佐太郎のところに押し付けてきました。

毎日の勤めに疲れ果てていた佐太郎は、村の衆が集まってくるのを見て、喜びました。

「おおい。みんな、分かってくれたんか。助けに来てくれたんか。」

ところが、村の衆は

「おおい、佐太郎。備前のもんに掘らせとるのをやめせんかい。」

「おまえらだけで水をとってしまおうたって、そうはいかさんぞ。」
といて、もってきた道具を振り上げました。

佐太郎は、驚きと悲しみのあまり、何も言わずに座り込んでしまいました。

「そんなつもりは、毛頭ないんでよ。わしは、みんなで米の飯をいっしょに腹一杯食いたいだけで・・・。」

文右衛門は、その騒ぎに身じろぎもせず、掘り続けていました。カチーン、カチーン。

「おい、やめんか。わからんのか。」

先頭の若い衆が、いきり立って文右衛門を引きずり出し、鉄のみを取り上げました。

よく見ると、文右衛門の手は、こぶだらけで、血がにじんでいました。黒かった髪は白髪になり、ほとんど抜け落ちていました。しかも、暗く狭いところに長く入っていたためか、目がよく見えず、手足がこわばって固まっていました。

鉄のみの鋭い音で耳も聞こえにくくなっていた文右衛門は、鉄のみを取り上げられると、光明真言を唱え出しました。

おんあほきやべいろしゃのう まかぼだらまに はんどまじんばら はらばりたやうん
おんあほきやべいろしゃのう まかぼだらまに はんどまじんばら はらばりたやうん

今度は、その姿を見た村の衆が、その場に座り込んでしまいました。

「わしらが、まちごうとったんかいな・・・。」

佐太郎は、ぽつぽつと話し出しました。

「文右衛門はんはな、若くして病のためになくなった息子の修蔵さんの菩提を弔うために八十八箇所を回っていなさった。備前では石工をしていたという事で、村のみんなのためになるならつちゆうて、岩穴を掘ることを引き受けてくださった。それにしても、なんで、昼は鉄のみでうがち、夜は光明真言。あまりにも根を詰めるので、心配になつて聞いてみた。そしたら、死んだもんは、根の國いうて地の中にあるところへ往くらしい、犬墓大師で経と真言を唱えて、地藏菩薩の住む地の中へ掘り進めていけば、息子に会えるかもしれないうて。」そこまで言うと、佐太郎は何も言えなくなり、ほほに一筋の涙がこぼれました。

「いや、それでも、水をとられたんでは困る。」

佐太郎は絞り出すような小さな声でつぶやきました。

「日開谷の下の大俣には、上池がある。日開谷川の水を引き込み、上喜来の村の田畑を潤す、その後、残りの水を上池に貯めて、下喜来や久勝の村の田畑を潤す。そうすりゃあ、みんなが水を手に入れて、みんなでうまい白い米を食うことがでけるんじゃないんか。」それは、米の握り飯を食わせてやりたいと言って亡くなった佐太郎の父親の言葉でもありました。

佐太郎、文右衛門、そして村の衆の周りには、一つ、二つと、蛍の灯りが集まつてきました。蛍の灯りがまるで、降る雪のようになったとき、村の衆は口々に話し始めました。

「佐太郎はん、すまんぞな。」

「文右衛門はん、ゆるしてつかあさいよ。」

村の衆は振り上げていた道具を下ろして、文右衛門と佐太郎が掘り出した岩を、一人、また一人と運び出し始めました。

「掘り出したこの石を使って、堰止めを作らんか。」

「ほうじゃ、入り口の前に堰を作ったら、水がすけないときでも入つてくるぞよ。」

「佐太郎はん、文右衛門はん、むしろ掘るけん、ちよつとでも休んでくれ。」

「文右衛門はん、掘り方を教えてくれ。」

日開谷、上喜来、大俣、三村の衆が代わる代わる岩穴を掘り出しました。

ところが、八月、阿波国は大雨が続き、日開谷川が氾濫しました。

「危ないぞ。鉄砲水が来るぞ。」

「みんな、はよ逃げろ、上の実相寺まで駆け上がれ。急げ。」

カチーン、カチーン。

鉄のみの音はそれでも響いていました。

「文右衛門はんはどうしたんや。」

「それが、逃げんです。言うたんやけど、いっちよも聞かんし、動かんのです。そのとき、一人の若い衆が岩穴の中へ走り出しました。」

「おい、もうあかんぞ。おまえだけでも逃げろ。」

その声を振り捨てて、その若い衆は走り込んでいきました。

泥水が木と石を巻き込みながら、龍のように下ってきました。村の衆は、文右衛門からもらった鉄のみをもって、命からがら高台にある実相寺まで逃げてきました。

「文右衛門はん・・・。」佐太郎は文右衛門からもらった鉄のみを強く握りしめました。村の衆が座り込んで動かなくなつた頃、二匹の螢が小さな光りを灯しながら上つてきました。その先には、文右衛門を背負つた若い衆が石段を登つて来るのが見えました。それは、岩穴を掘るのをやめさせようとしたとき、文右衛門を岩穴から引きずり出した吉弥でした。

「吉弥はん、ありがとう。」

「いやいや、ひどいことをした罪滅ぼしにもならん。」

そう言つて、吉弥は涙と汗をぬぐいました。

水が引いた後、今まで掘つた岩穴は、流れてきた石や木で埋まつてしまいました。

それを見た吉弥は、思い立つたように言いました。

「ほうじゃ、横穴を掘ればええんじゃ。」

「なんでや、吉弥。横穴を掘つたつて、水は真つ直ぐに流れんし、流れてきた水が横穴から流れ出してしまうやないか。」

「いや、今掘つとる穴より高いところを掘るんじゃ。ほうすれば、水は流れ出んし、もし、大水で埋まつたときも、横穴から取り出すことができる。もうあかんと思たときは、そのうわかさをいくことをしたらええんじゃ。鉄砲水が来たことは、ほんまに難儀なことやけど、今は、ほの向こう側には、もつとええことがあると思えるようになったんじゃ。いや、そうしていかなあかんと文右衛門はんから教えてもろたんじゃ。」

村の衆は、再び岩穴を掘り出しました。この頃、郡奉行からは下し金が送られ、助けに来た村の衆は五十人を超えていました。横穴は六か所、全長五〇〇mの岩穴が完成しようとしていました。

そんな日の夜、文右衛門は犬墓大師堂で夢を見ました。それは、若くして病のために、この世を去つた息子修蔵の夢でした。

「お父はん、ようがんばつたな。もうすぐ会えるでよ。」

「修蔵、生きとつたんか。よかつた、よかつた。おい、待ってくれ。いかんとつてくれ。」

カチーン、カチーン、鉄のみの音で文右衛門は目を覚ましました。

「夢か・・・。それでも、会えるような気がする。」

文右衛門は、岩穴へと向かいました。

岩穴の先では、吉弥が鉄のみを振るっていました。

「文右衛門さん、もう岩から出る音が違ってきてとります。もう少しで、きっと岩穴は通ります。最後は、文右衛門さんが鉄のみをあててください。」
鉄のみを受け取った文右衛門は、光明真言を唱えながら、最後の力を振り絞って金槌を鉄のみに当てました。

カーン。

それは、今までの鉄のみの音とは違う透き通る清らかな音でした。

鉄のみを引き抜くと、小さな穴から差し込む光の中に、見覚えのある懐かしい若い男の顔が見えました。

「修蔵、修蔵。」文右衛門は穴にすがりつきました。

「文右衛門じいじ。」

それは、備前に残してきた修蔵の一人息子、孫の千太郎でした。

文右衛門が岩穴を掘り出してから、七年の歳月が過ぎていました。孫の千太郎は立派な若者へと成長していました。佐太郎から知らせを受けた千太郎は、文右衛門に会いに来ていたのです。その後ろには、佐太郎や村の衆のうれしそうな顔ものぞいていました。

岩穴に水が通るときがやってきました。堰をかき上げし、水を流し込むと、勢いよく岩穴の中を滝のように水が流れてきました。北原の岩嶽に穿たれた岩滝用水の誕生です。

その後、岩滝用水は、日開谷、喜来、大俣の村々の田畑を潤し、黄金色の稲を実らすことができますようになりました。後世の村人は、文右衛門や佐太郎たちの努力を忘れず、記念の石碑を建立し、今でも大切に守っています。